

さといも

サトイモ科：インド・熱帯アジア

栽培暦

月 旬	3			4			5			6			7			8			9			10			11		
	上	中	下	上	中	下	上	中	下	上	中	下	上	中	下	上	中	下	上	中	下	上	中	下	上	中	下
主 な 作 業	露地栽培																										
	○ — ● — — — × — × — — — []																										
早掘り栽培																											
○ — ● — — — △ — × — — — × — — — []																											
○ 催芽 ● 定植 △ 不織布除去 × 追肥・培土 [] 収穫																											

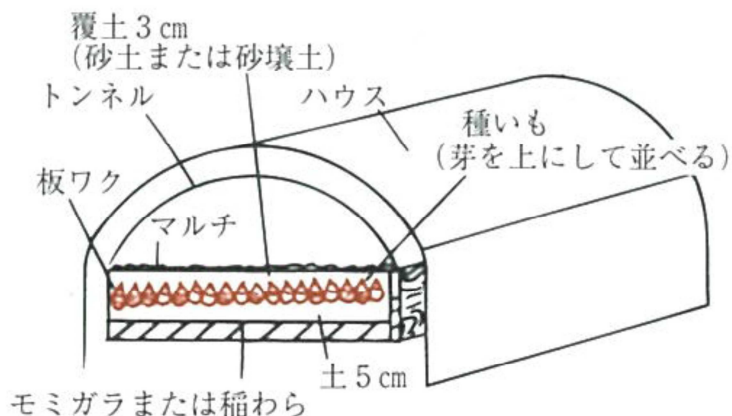
■栽培のポイント

1. 連作障害に弱い作物のため、3~4年の輪作を行う。
2. 乾燥に弱く、収量、品質に大きな影響を与えるため、干ばつ時にはかん水を行い、土壌水分を適湿に保つ。
3. 種いもの大小と覆土の多少が、生育を左右するため、種いもの大きさは揃え、覆土は十分に行う。

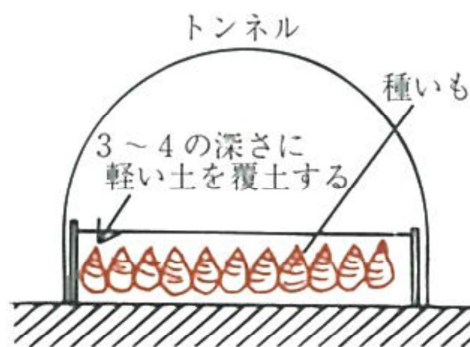
■品種・種子量 石川早生、土垂。種いものは1個50g程度のものをa当り17kg。

■催芽 パイプハウス内または日当りの良い所に、催芽床を作り、露地栽培で4月下旬、早掘り栽培で3月下旬に、種いもを伏せ込む。水分が多すぎると根が伸びすぎ、植え付け時の植え傷みがひどくなるので、かん水は少な目とし、芽だけ伸ばすようにする。日中の温度は25~27℃にし、夜間は保温マットやこもをかけて保温する。

トンネル保温催芽床



冷床催芽床

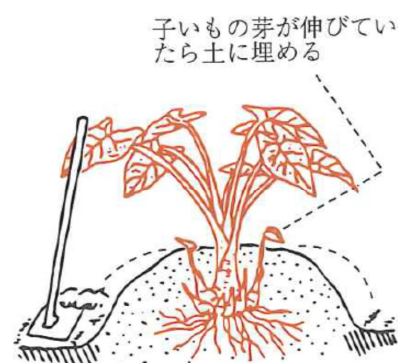


施肥例

(a 当り)

培土法

肥料名	基肥	追肥	備考
堆肥	400kg	—kg	成分量
苦土石灰	10	—	窒素 2.2kg
ポリポス S 666 P	10	—	リン酸 2.0
麟硝安加里 S 604	—	4	加里 2.2



苗を購入すれば催芽の手間を省くことができる。

- 定植準備 耐湿性は高いが、乾燥に弱いので、保水力のある畑を選ぶ。完熟堆肥を施用し耕起し、肥料は基肥で窒素、リン酸、加里とも 1.5 kg/a 程度を植え付け 15 日前に散布し、耕うんする。早掘り栽培では、うね立て後透明ポリマルチを行い、地温を高めておく。

■定植

栽植密度 露地栽培は、うね幅 80~90 cm、株間 40 cm。早掘り栽培では、うね幅 100 cm、株間 30 cm とする。高うね無培土で栽培する場合は、うね幅 110~130cm、ベット幅 70cm、高さ 30cm のかまぼこ状のうねを立て、株間 30cm とする。

植え付け 植え付けは露地栽培で晩霜の心配がない限り早く植える。早掘り栽培では 5 月上旬に行い、不織布（パスライトなど）をかけ保温を図る。

植え付けの深さ 露地栽培では 5~6 cm 覆土し、植え付け後のうね高は平うねか若干高め位で良い。早掘り栽培では 15 cm 程度に植え付ける。高うね無培土で栽培する場合は、深さ 15~20cm に植え付ける。

■本畑の管理

土寄せ 子いもの肥大をはかり、品質を高めるために、適期の土寄せは重要な作業である。早掘り栽培の場合、マルチを除去し、両側から十分に対着背する。土寄せは追肥と同時に行う。

かん水 土壌の乾燥には著しく弱いので、梅雨前及び梅雨明け後の乾燥時にはうね間にかん水する。夕方かん水して朝に水がひいている状態が良い。

- 病虫害防除 乾腐病、軟腐病は連作すると多発するので、連作を避け輪作を行う。また、種いもは無病畑からの健全なものを用いる。汚斑病は、生育初期過繁茂で後期から肥切れをおこした場合に多発するので、施肥に注意する。アブラムシ類、ハスモンヨトウは発生初期に防除する。

■収穫・収量

収穫期 9 月中旬~11 月上旬。

収量 a 当り 200~250 kg。